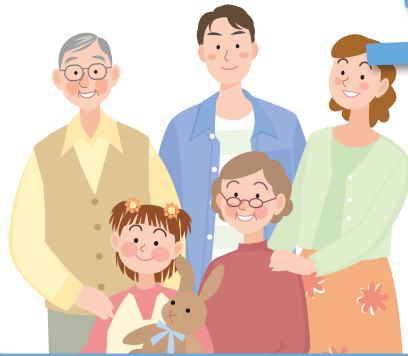


笑顔の ひろば



vol. **32**
2016年 新年号

川崎協同病院
広報誌

<http://www.kawasaki-kyodo.jp>

将来構想実現へ、 地域に求められる病院をめざして



院長 田中 久善

明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願い申し上げます。

少子高齢化・人口減少という課題を社会が抱えるなか、川崎協同病院でもこうした問題を踏まえて、協同病院ならびに協同ふじさきクリニックの将来構想を昨年3月に作り上げました。具体的には病院リニューアルをはじめ、電子カルテ導入、独自の地域包括ケアと高齢者医療、新医師専門医制度を見据えた医師政策、そして防災対策などを討議してきました。

その実践としては、昨年5月に病院に電子カルテを導入しました。導入当初は職員の残業時間も多くなり慣れるまで大変でしたが、幸いにもシステムダウンなど大きな問題もなく経過し、診療録の精度の向上を図ることができました。今後は診療統計・分析(CI/QI)・経営分析などへの応用をはじめとしIT化のメリットを十分生かしていくことが課題です。

医師政策では、医師臨床研修に関して、基幹型臨床研修病院になっている当院では2016年は3人のフルマッチができました。今年4月には新人医師をむかえる予定です。

2017年度から始まる新専門医制度への対応については、まず総合診療科は基幹施設として、そして内科・外科・小児科・整形外科・リハビリテーション科・病理科は連携施設として申請を行う予定です。今後プログラム作成が急務となっています。

昨年12月には研修第三者評価(JCEP)受審を終え、講評時にサーベイヤーの先生方より「初期研修は、患者

さんを最初から最後まで診られる中小規模の病院で行うことが望ましいと改めて感じました」、「狭いながらもスタッフの夢と熱意を感じました」と高評価をいただきました。

このほか昨年11月からは小児科で川崎市日中一時支援(障害児・者一時預かり)事業に参加しました。ご家族からは喜ばれていますが、まだ参加病院は少なく今後はスタッフの修練が必要と考えます。

地域包括ケア、在宅・高齢者医療については、積極的な情報交換と受け入れを行い、引き続き地域の診療所、介護事業所との連携、関係づくりに努めていきます。

新たな年を迎え、これからも地域に求められる病院として、地域包括ケアの中心的役割を担い、前進できるように頑張っていきたいと決意を新たにしています。



院長をかこむ医師たち



卒後臨床研修第三者評価（JCEP）受審！！

～狭いながらも多くのスタッフの夢と熱意に溢れた病院～

2015年12月17日、卒後臨床研修評価機構の第三者評価（JCEP）の更新訪問調査を受けました。（写真）この評価は、研修医を育てる病院として、厚生労働省が定めた内容をきちんとクリアしているか、研修医が生き生きと研修できているかを調査認定されるものです。

今回は2011年に受けた認定の更新調査でしたが、電子カルテ導入後の受審ということで、7月からプロジェ

クトチームを作り、手順書の改定から診療の流れまで、多くの部分の見直しを行いました。

当日は、「書類審査」「各部署訪問」「研修医・指導医インタビュー」が行われました。各部署訪問では、各職場の責任者が研修医との関わりやシステムをアピール。調査員に病院全体で研修医を見守り、育てている様子を感じてもらうことができました。

最後の講評では、「狭いながらも多くのスタッフの夢と熱意に溢れた病院でした」「初期研修は、患者さんを最初から最後まで診ることのできる貴院のような中小規模の病院で行うことが望ましいと改めて感じました」とお褒めの言葉をいただきました。

準備は大変でしたが、研修について見直し改善を行う良い機会になりました。また、病院全体で誇れる研修が行えていることを再認識でき、職員の自信になりました。

医局事務室 国分博子



STAFF 「もうひとつの顔」

シャッターを切る喜びを感じ続けて

地域連携室 相談課 ソーシャルワーカー 児玉 桃太郎

川崎協同病院でソーシャルワーカーを始めて3年目の児玉です。介護や生活の困りごとの相談、援助する仕事をしています。

私は休日には愛機のニコンのF3（半オートの一眼レフ）とD50（10年程前の家族向けながらデジタル一眼レフ）、オリンパスのSix III（中判フィルムの骨董品）というカメラを持って家を出ます。一人あてなく街を歩いたり職場の仲間や学生時代の友人と小旅行

へ出たり、時には夜景や日の出どきを狙いに車中泊をしたり、ふと昼に思い立ち黄昏時を狙い出かけることもあります。

昨年の全日本民医連厚生事業協写真コンテストでは初夏に



毎日相談にこられる人に応待する



自然に囲まれ、シャッターをきる

葉桜と空蝉などを写した組写真で佳作に選ばれました。

写真はカメラがあれば撮れますが、その主題をどう写すのか、距離感や視線、風合いはどうするかは十人十色です。自分なりに工夫して撮ってみると奥が深いです。ファインダーを通して映る世界は日々を忘れさせてくれます。また、写真はその時々が無意識の心模様や日常を鋭く写し取ります。カメラを休日に持ち歩くようになってまだ4年あまり、シャッターを切る喜びは尽きません。

今後も休日には少し仕事から離れて写真を撮りに出かけ、またリフレッシュして仕事に励んでいければと思います。

私が担当します！

外部研修の経験を活かしつつ、 患者に寄り添った医療を



外科 小倉 礼那

外科後期研修医の小倉です。2015年6～9月の4ヵ月間他病院で心臓血管外科と呼吸器外科の研修をしてきました。当院の外科は一般外科といって、消化器疾患（胃がん・大腸がん・虫垂炎〔盲腸〕・ヘルニア〔脱腸〕）や乳腺疾患（乳がんなど）に対する手術が主なので、当院ではあまり経験できない肺や心臓の手術を専門科で学んできました。

心臓血管外科では大動脈解離（血管がさける病気）、大動脈瘤破裂（大動脈が拡張して瘤のようになり破裂する病気）などの緊急手術を多く経験しました。数時間以内に命に関わり、手術をしないと救命できない疾患ばかりでした。わずか4人の医師で365日24時間可能なかぎり緊急手術を受けるという意欲と熱心さに刺激を受けました。

高知大学医学部卒。川崎協同病院で2年間の初期研修を終え、引き続き外科で研修中。

呼吸器外科はがんセンターでの研修だったので、肺がんの手術が主でした。最先端のがん治療をみることができ、また肺の手術を数件執刀させてもらいました。

この4ヵ月の研修で肺や心臓の手術が修得できたわけではありませんが、当院での診療に活かすことのできる技術や知識を身につけることができました。他院と比べて中小規模の当院は科の結びつきが強く、連携が密にとれていることを改めて実感しました。また患者さんに寄り添う医療の展開はひけをとらないと思います。

現在、外科外来や内視鏡検査を担当しています。外科領域でお悩みの方は気軽に御相談ください。

重症児者の日中あずかり医療を開始 ～小児科の空き病床を利用～



小児医療の進歩が数多くの子どもの命を救えるようになった一方で、重い障害を残して生活をしていく人たちがいます。なかでも特に障害の重い人を重症心身障害児者（以下重症児者）といいます。

幼い時から医療を必要とするため家族の負担はとて大きいものがありますが、当院の診療圏である川崎南部は重症児者の利用できる施設が少なく、本人はもとより家族も

大きな負担を強いられています。

こうした状況になんとか対応しようと、当院では地域の重症児者とその家族の負担を少しでも軽減できるように、小児科の空き病床を利用し重症児者を対象とした日中あずかり医療を開始しました。



小児科医師 高村 彰夫

これは医療型特定短期入所（宿泊を伴わない）という制度を利用したもので、日中、病院の小児科病棟で重症児者をあずかって医療ケアを行います。

利用を希望する場合は、住居地のある区の区役所で担当のケースワーカーに相談すると申請の手続きができます。

まだ規模の小さな取り組みのため、多くの家族に利用していただくことはできませんが、少しでも地域の重症児者とそのご家族の役に立つことができればと考えています。



患者さんのベットまわりの環境をととのえる



一緒に考え生活をかえる ～障害者を対象とした公的相談機関～ 地域相談支援センター ふじみ

病院は地域との連携がなにより大切。近隣の医療、福祉関係の施設や機関を訪問し、毎回紹介しています。第12回は「地域相談支援センターふじみ」です。

(取材：地域連携室 高橋 靖明 鍵屋 真理)

「地域相談支援センターふじみ」は、野球場裏のバス停を下りて徒歩2分。旧川崎球場裏の富士見公園の向かい側にある茶色の建物(写真右)、川崎市社会福祉事業団が運営する障害者のデイサービス施設「川崎市ふじみ園」の3階にあります。

施設に入ると、1階には障害を持つ利用者の通所サービスが行われており、みんなの笑い声が聞こえてきました。相談支援専門員の北嶋寛子さんは、「相談に来られた方が生活しやすくなった、利用して良かった、と言ってくれる時はやって良かったと思う」と素敵な笑顔で穏やかに話します。

地域相談支援センターとは、川崎市から委託を受けた法人が設置運営する障害者を対象とした公的な相談機関です。障害のある人やその家族、地域に住んでいる人、関係機関の人など、障害種別や年齢、障害者手帳の有無にかかわらず、だれもがどんなことでも相談できる相談窓口です。

川崎市内の各区にはこうした支援センターが4カ所ありますが、相談をしたい人は居住する区内のどの支援センターでも利用できます。

障害を持つ人は、生活していくうえで多くの不安を抱えています。支援センターでは、身体障害、精神障害、知的障害にかかわる問題について対応しています。住み慣れた



日々相談に追われるスタッフ

地域で、安心して暮らしていけるように、心配な事やこれからの事を一緒に考えます。例えば、サービスの利用や就労相談、経

済面や医療・健康に関する相談など、困っていること、不安なこと、はっきりしていないことでも一緒に考えます。

相談の内容により、地域で解決できない時は、川崎市地域自

立支援協議会(障害者や家族、特別支援学校、区役所、日中活動事業所、相談機関、社会福祉協議会が参加して毎月1回地域の課題を解決に向けて話し合う機関)で検討され、障害のある人が安心して暮らせる街を目指して検討・協議しています。

「ふじみ」は、利用者の思いを大切に、寄り添った支援を心がけています。その人らしい生活ができるように支援やサービスに引き継ぐこと。気軽に相談しやすい事業所を目指しています。また、地域の運動会への参加など、地域との交流も積極的に行っています。

●川崎協同病院へひとこと・・・

いつでも気軽に相談しやすい、連携しやすい病院です。今後とも、お互いにより良い連携を取っていかれたらと思っています。

●おじゃまして・・・

少人数でたくさんの相談件数を抱え、常にだれかが訪問している忙しいなかでもスタッフは常に笑顔で明るく対応されてました。話を聞くのがとても上手で、私も見習わなければと思いました。(鍵)

社会福祉法人 川崎市社会福祉事業団

地域相談支援センターふじみ

代表 センター長 丸山 尚氏

川崎市川崎区大島 1-8-6

メール：kawasaki-tiikisoudan@kfj.or.jp

TEL：044-233-9949



広報係 の ひとりゴト

土日に福島県郡山の桑野協立病院へ当直支援に行ってきました。大震災、福島原発事故後、体制のきびしくなった同病院に、全国の民医連から土日当直の支援が入っています。駅からタクシーに乗った際、運転手が中継されていた郡山と沖縄のバスケットの試合に気をとられ誤って他の病院に連れていかれるというハプニングはありましたが(笑)、時間通りに到着しました。病院受付には、郡山市内の放射線線量の測定結果が掲示されているのを見て原発反対の思いを新たにしました。

副院長 安西 光洋

